

# 今を未来に

## 土曜授業 「保々のつどい」が開催できました。

2月3日(土)今年度最後の土曜授業「保々のつどい」が開催できました。「保々のつどい」は、子どもたちがこの1年間で学んできたこと、これからできると気づいたことを、授業や振り返りなどで書いたり、話し合ったりした記録からシナリオが作られています。ですから、大切な発表会ととらえていますし、保々の地域の皆様にも気持ちを伝えたいという願いから、本会の名称を「保々のつどい」としてきました。子どもたちが「誰もが幸せになるために」「どんな生き方をしていきたい」と考えてきたか、保護者の皆様、地域の皆様、そして他学年のなかまに伝わったと信じて、振り返ってみたいと思います。

## 1年生 「ほぼちくたんけんたい・おしごとスタンプラリー」

生活科で学んできた「地区探検・学校探検」「お仕事スタンプラリー」を中心に、6年生にお世話になったことやお世話になったのに呼びつけていたこと、でも高学年の子から男女仲良くしていたら「ラブラブやな。」って言われるの嫌やなあって話し合ったことを、全校のみんなに聞いてもらいました。

地区探検では、友だちがいつも遊んでいる公園やグラウンドに行ってお遊んだりして、友だちのことを少しずつ知っていきました。学校探検では給食を作る様子を、給食室の外からのぞかせてもらいました。調理員さんの働く姿を見たり、自分たちで野菜を育てたりして、苦手な野菜も食べられるようになろうと思いました。

そして、保々の保育園・幼稚園の年長の子たちと、一学年上の先輩として、何度か交流会を持ちました。2学期には、自分たちが学校生活を楽しく過ごすためにできるようになっているといいなあ話し合った「いろいろなひも結び」「ほうき・ちりどりの使い方」「雑巾しぼり」「味噌汁のよそい方」「お弁当箱包み」「紙折り」「鉛筆の持ち方」などを、発表の中で実演してくれました。

最後に、男女関係なくみんなが仲良くしていい学校、そんな保々小学校が心配なくてすむ、みんなが安心していられる学校にしたいと思っているという事を、1年生の子どもたちに教えてもらいました。

## 2年生 「ほぼの人たちと出会って」

2年生は地区探検をしながら、友だちのことをもっと知って、地域の方との出会いで教えていただいたことから、発表が始まりました。出会いからたくさんの学びがあることに気づき、2学期は学校や地域で働く方との出会いから学びました。

最初の出会いは、給食室の調理員さんです。たった6人の調理員さんが、毎日約400食の給食を安全に・確実に時間に間に合うように作って下さり、時には、四日市市内の小学校へ応援に行くと、4人でいつものように給食を作



自分たちで野菜を育てたりして、苦手な



て下さり、時には、四日市市内の小学校へ応援に行くと、4人でいつものように給食を作

らなければいけないことから、普段から手際よく、しかも子どもたちが給食を楽しみにしてくれるようにと、野菜を飾り切りしてくださったりして提供してくれていることを、観察や調理員さんや栄養教諭さんから教えてもらって、知ることができました。発表では、いつもどうやって給食を作っているか、実物の道具や窯の大きさを表す段ボール製の窯の口を見せたりして、全校のみんなに教えてくれました。2年生はもちろんですが、2年生の発表から「給食をちゃんと食べよう。」「片づけも気を付けることがある。」と、改めて考えた他学年の子どもたちであったと思います。

また、四日市北消防署保々出張所に勤務されている小崎消防士との出会いも、職業に夢を持つとき、「自分にはだめかなあ。」ではなく「この仕事をやってみたい。」と考えて、その夢につながる努力をすることが大切なことであることに気づきました。

人との出会いを通して、自分で確かめることが大切、友だちと話し合ったりしながら気づいていくことが大切と教えてくれた2年生でした。



### 3年生 「みんなでたのしもう」

3年生になるころには、子どもたちは子どもたちなりに「あの子はどういう人」などと決めつけてしまうことがあります。それが理由で、友だちとうまく遊べないこともあります。そんな自分を振り返って欲しいと願って、今年の3年生は「みんなでたのしもう」ということをテーマに、1学期は保々の保育園・幼稚園の子たちと、2学期は聖十字在宅介護サービスセンターを利用されているお年寄りと、3学期はポップメイツの方々との出会い・交流を通して、勝

手に決めつけたりしないで、相手を知ろうとすること、どうしたら楽しく過ごせるかを自分が考えることが大切だと気づいたことを発表しました。

小さい子たちに対して、「勝手にどこかへ行く」「すぐ泣いてしまう」「言う事を聞かない」と、思い込んでいました。一緒に遊ぶことで「いろいろな子がいる・一人ひとり違う」と気づいていきました。お年寄りは（聖十字在宅介護サービスセンターに通われている方）は、「耳が遠くて話がしにくい」「何を話したらいいのかわからない」と思っていました。お手玉をしたり教えてもらったり、折り紙を一緒にしたりして楽しんでくれたこと、知ってもらうためには名札を工夫したり、話し方や声の大きさを考えると、お年寄りからいっぱい話をしてもらって、楽しく会話できることに気づいていきました。ポップメイツの方のピアノやハンドベルの演奏を聞かせてもらって、発表を見させてもらって、実際に自分たちもハンドベルをやらせてもらう中で「障害がある人たちののにすごいなあ」という友だちの感想を聞きました。何かおかしいと思いました。「演奏がすごかったけど、そこに障害があるからってというのは決めつけにつながっていないか」と、振り返ることができました。

たくさんの人と出会うことで、その人たちと楽しく過ごすことを考えてきて、そして、学級や学年でお楽しみ会を自分たちの力でやり切ることで、決めつけがなければ、出会った人やなかまの新たな姿が見えてくることに気づいた3年生でした。



### 4年生 「命を守る 食と防災」

「チャラララ、チャラララ、緊急地震速報です。大きなゆれがもうすぐやってきます。身を守る行動をとってください」と、発表も避難訓練の様子から始まりました。避難訓練では「おはしも」を合言葉に、自分の命を守ることがなかまの命を守ることにつながることを学んでいます。もし、大きな地震が本当に起こったら、私たちの身の回りでどんなことが起こるの

か、みんなで考え合いました。そのことを確かめるために、四日市市危機管理室の田中さんの話を聞かせてもらいました。自分たちの予想が当たっている部分も多くありましたが、避難所に行く道や町は、昨日まで見ていたものとは全く違う景色になってしまうこと、自分の家でも赤い紙が貼られるともう入ることができないこと、避難所の生活でどんなことに困るのか、避難所運営がうまくいく所とそうでない所があることを知りました。避難所の運営のキーワードは「人任せにしない」ということでした。じゃあ自分たちはどうかと振り返ってみると、発表をするときも誰かが言ってくれると人任せにしていたり、ぐちゃぐちゃの牛乳パックをそのままにしていたりしていました。「人任せにしない」とお話を聞いた田中さんに質問ができない自分たち、そのことに気づけたのは、担任の先生に「それっておかしくない？」と、尋ねられてからでした。

防災の学習をもっと深めて、「人任せにしない自分になろう」と、4年生はさらに防災倉庫について調べていきました。調べていくことになったもう一つのきっかけが、非常食でした。家庭にある非常食を持ってきて食べている友だちをいいなあと思ったり、食べた子もおいしいと感じられなかったりするのとはなぜかと、考えました。そして、小学校や地区市民センターの防災倉庫に非常食が準備されていること、実際に地域防災組織の方をお願いして非常食を全員で分けて食べる経験をさせてもらったり、防災倉庫によって非常食や備蓄されている備品が違ったりすることもわかってきました。防災倉庫の中身も、非常食の種類もいろいろな物が作られていることを知って、命を守ることができるようになるには「人任せ・自分勝手ではだめだ」と、考えることができるようになった4年生です。そうやって学ぶ中で、みんなの命を守ることが自分の命を守ることになるということにも気づいていきました。発表にはありませんでしたが、田中さんの話を聞かせてもらった後に行った社会見学では、施設の方に自分からどんどん質問ができる4年生でした。

## 5年生 「だれもが認め合えるように」

5年生は社会科の学習と重ねながら、外国とのつながりについて、学んできました。外国から来ている方に、外国にルーツを持つ方に対して、自分たちはどんなイメージをもっているのか、3年生の学習にもありましたが、知らないことが決めつけにつながっていないかと、考えていきました。そもそも、自分たちはまず外国のことを知っているのだろうか。三重県は全国で5番目に外国から来た方が多く住む県です。四日市市ではおよそ8,000人の外国につながる方が住んでみえます。ブラジル、韓国、朝鮮、中国、フィリピン、ペルー・・・たくさんの国の中から、6か国（韓国、タイ、ハンガリー、アメリカ、コスタリカ、コロンビア）につながりを持つ方々から、その国の言葉や文化を教えてくださいました。



夏休みには、外国の料理を調べて作ってみて新聞にまとめるという宿題がありました。友だちが調べたものから、日本食のように食べていたものがもともとは外国から伝わったものであったことを知りました。また、味についても思い込みがあることも知りました。食べ物のことについては、社会科の学習で「食料自給率」が日本は約40%であることを知りました。学用品の原材料も同じです。世界とこんなにもつながっていることを知りました。でも、世界の中ではそのつながりを切ってしまう出来事が、毎日のようにどこかで起きています。そして、日本の国の中でも「外国の方はお断り」「ごみ出しルールを守らないのは外国の方」といった言い方・見方があります。絶対におかしいと思う5年生のなかまです。でも、外国の人が多くなってきていると知った時「外国の人が増えたらやばい」という言葉を発した友だちがいました。その言葉を聞き流してしまったのはなぜなのか。そう思っている自分がいたからではないか、確かめもせず考えないで聞き流している自分たちがいるからではないかと考えました。日本の国の労働力としてきてもらった外国の方だからではなく、もう一度自分たちの考え方、行動の仕方と結び付けて、考えてほしいと思う5年生でした。

## 6年生 「差別をなくす活動をしよう」

6年生はこの1年間の学びだけではなく、「誰もが幸せになるために」「どんな生き方ができる人になりたいのか」を、いろいろな人権課題を通して、考えてきました。その中の一つが部落差別です。6年間の人権総合学習のまとめとして、卒業するまでに何ができるかを考えました。6年A組は、差別をなくしたいと考えている自分たちの考えを、地域の方にも知ってもらうためには何ができるかを考え、しおりづくり、劇づくり、ホームページで知ってもらう、市長に条例を作ってもらおう、Tシャツづくりなどを考え、その準備を進めています。6年B組は修学旅行で水平社設立大会が行われた水平社運動発祥の地で聞いた人権ボランティアの方の話をきっかけに、水平社大会当日の様子を自分たちなりに時代背景も考えながら、劇にしていきました。A組の仲間から「気持ちが伝わってきた」という感想をもらって、「保々のつどい」でも見てほしいと考え、劇の内容を半分ほどにして表現してみました。



そして、こうした自分たちと同じように差別をなくす取り組みをされている松村元樹さんの話を聞きました。その中で「100%の自分が出せているか」と聞かれました。誰一人100%の自分が出せているとは応えられませんでした。なかまが100%の自分が出せないのはなぜなのか、逆に出せる時はどんな時なのか、それはまわりに受け止めてくれるなかまがいるからではないかと、松村さんから言われたことをきっかけに、本当は前から聴いてほしかったということや、

そのことについて実は知っていたけど訊いていいか悩んでいたということや、互いに伝え合うことができました。もちろんそんな話し合いができたのは、松村さんの話をきっかけとして、今までに「話してよかった。」と思えるような話し合いの経験を積んできた6年生だからこそできたことであつたと思います。

保々のつどいが始まる時、校長の挨拶の中で「5年生と、6年生の中にはここ数日大きな課題があつて、学級・学年で話し合ってきた、中には台詞と重なって辛い思いをしている（間違つた行動をした子は、自分からそのことが言えなかったこと。知っていたが止められなかった子は、なぜ見て見ぬふりをしていたのかと考えていること。）子がいる。」という話をしました。6年生は「保々のつどい」の発表の中にもあつたように、100%の自分を出せるか、そんな生き方ができる人になるには何が大切なのかを考えてきたからこそ、今のところ学年の中で隠すことなく話ができているようです。

保々のつどいの後、学校運営協議会が開かれ、地域・保護者の代表の方からは、「自分たちが知らないこともあつた」「全学年の発表を聞くことで学校全体で取り組んでいることがよくわかつた」「低学年の児童ほど生活に密着していることが内容となつてよくわかつた」などの感想をいただき、「保護者の方の参加がこの3年間の中で一番多かつた。」「だからこそ、全学年の発表を保護者の方にも最後まで聞いてほしかったですね。」と、ご意見をいただきました。